令和７年度　第２回滋賀県環境学習等推進協議会　議事概要

日時：令和８年２月９日（月）10 時 30 分～12 時
場所：滋賀県危機管理センター　１階 会議室１
出席：委員 13 名（14 名／17 名）
　　事務局（環境政策課、琵琶湖博物館環境学習センター、幼小中教育課、生涯学習課）
　　オブザーバー（高校教育課）

■議事（１）「第五次滋賀県環境学習推進計画」の県民政策コメントの結果について
　資料 1-1、1-2、参考１に基づき、事務局（環境政策課）から説明

委員
- 夕食時に限る必要はないのではないか。家庭によっては、食事中にテレビを消している場合もある。「生き物に関するテレビ番組を見る」だけでも十分ではないか。＜資料 1-2,No.27＞

事務局
- 御指摘のとおり修文したい。

委員
- 「びわ湖を学ぼう」を紹介しているが、琵琶湖博物館の公式 YouTube チャンネル「びわこのちからチャンネル」も凄くよく出来ており、環境学習につながる。追加してはどうか。＜資料 1-2,No.27＞
- 「子どもたちに自然に触れる機会を提供する」の主体は誰か。＜資料 1-2,No.28＞

事務局
- 「びわこのちからチャンネル」に関する記載を追記する。
- 親が子どもに提供することを想定していた。わかりやすくするため、表現を検討する。

会長
- 「夕食時」に関する指摘はそのとおり。また、テレビ番組だけでなく、琵琶湖博物館など滋賀県には環境学習に関する様々なウェブサイトがあるため、折角なので紹介してはどうか。テレビ離れもあるため、オンラインでも様々な学習ができることを紹介してはどうか。＜資料 1-2,No.27＞

事務局
- 御指摘のとおり。幅広く色々なことができる、という方向で修文したい。

副会長

- 「生き物に関するテレビ番組を見る＝環境学習」ではハードルが低すぎないか。環境学習を体系的、総合的に進めると規定している本計画において、ハードルを下げすぎるのはよくない。例えば、テレビを見て新たなことを知ったり考えるなど、受け手の思考が入るとよいのでは。聞き流すことは環境学習ではない。受け手の反応を含む書きぶりに変えられないか。＜資料 1-2,No.27＞

事務局

- ギアモデルにも記載がある部分。見るだけでなく、その先に繋がる書きぶりに修正する。

委員

- 「夕食時に」と書かれた意図は、家族で見ながら会話することを含んでいるはず。このニュアンスを含む形になると有り難い。＜資料 1-2,No.27＞

事務局

- 承知した。

委員

- 「いるかもしれませんが」ではなく、「おられるかもしれませんが」の方が適切ではないか。＜資料 1-2,No.27＞

事務局

- 承知した。

副会長

- 質問前半（どのような指導者・リーダーか）に対して適切に回答できていないのではないか。＜資料 1-2,No.19＞
- これまで本計画が改定される中で、ESD の視点が取り入れられ、環境学習とは自然環境に特化したものではなく、広い視点として暮らしや文化も含まれるようになってきたはず。一方で、回答案では「生き物や自然を大切に想う心」を原点として記載しており、昔の議論に戻ってしまうのではないか。環境学習とは、人と人、人と文化、人と自然のつながりを大切にできるなど、文化や暮らしを含む書きぶりにできないか。＜資料 1-2,No.19＞

事務局

- 御指摘のとおり、ESD の視点を取り入れて広がってきており、書きぶりが不足していた。一方で、指導者の資質については修文が難しいため、副会長と相談しながら回答案を作成したい。

委員

- 回答案のほかに、環境学習センターの人材育成を「センター職員の育成」という読み方もできると考えるが、質問の意図には適した回答になっているか。＜資料 1-2,No.23＞

事務局

- 質問者に確認をしたわけではないが、環境学習センターの役割の１つとして人材育成があることを踏まえ、環境学習センターが事業として行う人材育成に対する質問であると捉えている。一方、環境学習センターの職員についても、環境学習の担い手であることから、職員の人材育成も重要であると考えている。

■議事（２）「第五次滋賀県環境学習推進計画」の進行管理方法の検討について
資料 2-1、2-2、参考２に基づき、事務局（環境政策課）から説明

会長

- 「環境保全行動実施率の数値指標」と書かれているが、「環境保全行動実施率の達成すべき数値指標」とした方がより明確な説明になるのではないか。＜資料 2-1,3(1)＞

事務局

- 承知した。

副会長

- 以前のシートよりも具体的でわかりやすくなった。
- ⑮の質問について、協議会で議論した回答はどのような形で各課にフィードバックされるのか。また、協議会でどこまで議論をすべきか。＜資料 2-2＞

事務局

- 新しい試みのためやってみてという部分もあるが、協議会の議事録から抽出し、担当課に「このような意見をいただいたので、施策にご活用ください」とフィードバックする形を想定している。また、御意見の反映状況については、事業結果報告シートで確認する形を想定している。予算や人員の都合上、いただいた御意見のとおりに反映できないものもあろうかと思うが、少なくとも、実績については回答してもらう。
- これから始めることなので、ぜひ御意見をいただきながら進めていきたい。

委員

- シートの変更によって、内容がわかりやすくなった。
- 成果や参加者の変化を書く欄がないため、追加いただきたい。＜資料 2-2＞

事務局

- こちらは事業計画報告シートであり、事業結果報告シートも作成する必要があると考

えている。その中で、成果や参加者の反応などを聞く形を想定している。

会長

- こちらは事業を実施する前に回答いただくシートということで、若干混乱する部分があったかもしれない。
- 事業計画報告シートを提出いただき、協議会で議論し、事業を実施いただき、その結果を確認するという仕組みがわかりやすくなると、より効果的な試みになるのでは。
- 参加人数など数字で表しやすいものが使われがちだが、数字だけで捉えきれない評価や課題がある。これを書き込めるとよい欄があるとよい。＜資料 2-2＞

事務局

- 御指摘の方向で進めたい。

委員

- 指標は数値だけなのか。「このような効果を生み出した」などは指標にはならないのか。＜資料 2-2＞

事務局

- 目標値として設定するもの以外にも、「このような効果があった」などの実行側の気づきについては別途欄を設けて記載いただくのがよいのではないかと考えた。

委員

- 事業結果報告シートも作成した際にはまた見せていただきたい。

委員

- 事業結果報告シートはどのタイミングで提出いただくものなのか。⑮の質問に協議会で回答したとして、事業実施までに反映できるスケジュール感で進むものなのか。また、事業結果報告シートの成果に基づく議論ができてもよいのではないか。＜資料 2-2＞

事務局

- 年度初めに照会を行い、前年度の実績および今年度の目標を回答いただき、第１回の協議会で協議いただく。事業結果については、年度末か年度初めがよいのかは今後検討するが、このようなスケジュール感を想定している。
- 一方で、協議会を開催した時点で既に事業が終了しているものもあるかもしれない。ただし、次年度事業に生かすことはできる。

会長

- タイミングが重要。事業計画が確定してから意見を出した場合、次年度事業にきちんと反映されるのか不安を覚える。これまでは、実施結果に対する議論をしてきた。折角の議論がすぐに反映されないのであれば勿体ない。事業計画の確定前に議論ができるのが理想的だが。

委員

- 県の立場で申し上げる。
- 次年度事業の計画を立て始めるのは夏。第１回協議会でいただいた御意見を次年度に反映させることはそれほど難しい話でなく、寧ろ、遅いと反映できずに更に翌年ということになる。予算を立てだす際に次年度事業計画を考えだすため、このタイミングでよいのではないか。

事務局

- 夏前に第１回協議会を開催できれば、次年度事業には反映できる。

会長

- またスケジュール感を見せてもらいたい。

事務局

- 承知した。

委員

- 昨年度は 78 事業あった。⑮の質問が 78 個出てきた場合、協議会の限られた時間内で議論することは現実的に不可能。しかし、質問いただいている以上、まじめに回答をしないと、資料が形骸化してしまう。各課が「書いても何も回答がもらえないし、適当にやろう」となってしまうと非常に勿体ない。協議会の分科会を作って分担したり、事前に質問を確認して回答するなど、工夫をしないと難しいのではないか。＜資料 2-2＞
- 事業指標について、参加人数だけで十分に評価できるものは少ない。アンケート結果など、定性的なものも活用できるようにした方がよいのではないか。＜資料 2-2＞

事務局

- ⑮の質問については、一定グルーピングができるものと考えている。これによって、例えば 78 個を 10 個に絞り、検討できるとよいのではないかと考えていた。想定以上に質問がばらけて数が多くなった場合には、追ってご相談をさせていただき、対応を検討したい。
- これまでの進行管理でも担当課に指標を検討いただき、結果を「よかった・横這い・悪かった」という形で確認している。事業結果を反映できる指標を検討いただいているため、定性的な指標を使用する担当課も出てくるものと考えている。

会長

- 78 個質問が出てくると対応しきれない。分野や部局で絞ったり、それでも多すぎる場合は分科会の検討もありうると感じた。

副会長

- ⑮の質問について、「意見をいただきたいこと」ではなく「課題」で留めた方がよいのではないかと感じる。前者の場合、意見がもらえることを期待して書いていただくこと

になる。課題については、共通する経験もあったりするため、意見ができる。一方で、イベント等への助言の場合、どの課も一生懸命考えて経年で取り組んできたものに対して、意見することは難しいのではないか。困っていることや課題に対するものであれば、少しは助言できることもあるかもしれない。これであれば、委員の負担も抑えられる。＜資料 2-2＞

事務局

- 協議会に頼りすぎではないかとの思いもあった。御意見いただいた方向で検討を進めたい。

委員

- 課題を共有して、委員で知恵を出し合う形の方が進めやすいのではないか。次年度に反映いただけるとのことなので、共に考えていきたいという気持ちの方が強い。＜資料 2-2＞

事務局

- 承知した。

会長

- 次年度の第１回協議会までにもう１度議論するタイミングはあるか。

事務局

- いただいた御意見を踏まえて修正し、メールで確認を依頼させていただく。年度内に取り組む。

会長

- 各課に担当事業がどのアウトプット指標に該当しているかがわかるとよいのではないか。＜資料 2-2＞

事務局

- 「施策の分類」とアウトプット指標がそのまま対応している。

会長

- これがどのように反映されるのかわかりづらいのではないか。

事務局

- まとめ方として、アウトプット指標ごとに事業結果を分析し、指標ごとに評価していく形を想定している。

会長

- 「施策の分類」ではなく、「アウトプット指標」と標記した方がよいのではないか。

事務局

- 御指摘のとおり。照会の際の説明文の標記も工夫したい。

委員

- 企業でも、環境目標とそれに対する手段を決め、本計画のアウトカム指標やアウトプット指標のように進めていくが、最終目的地にこれが繋がっているのか、目的と手段が合っているのか、いつも悩む。同じような悩みが、企業だけでなく、どこにもあることを感じた。この場に参加した経験を参考にしながら、企業に持ち帰って活かしていきたい。

会長

- 環境学習は数値的に評価することは難しい分野。企業では、それでも次の活動に向けて目標を定めて実施する必要があるという環境の中で取り組まれているはず。今後もぜひ御意見をいただきたい。

■議事（３）その他

委員が持参したチラシに基づき、各担当者から説明

（以上）